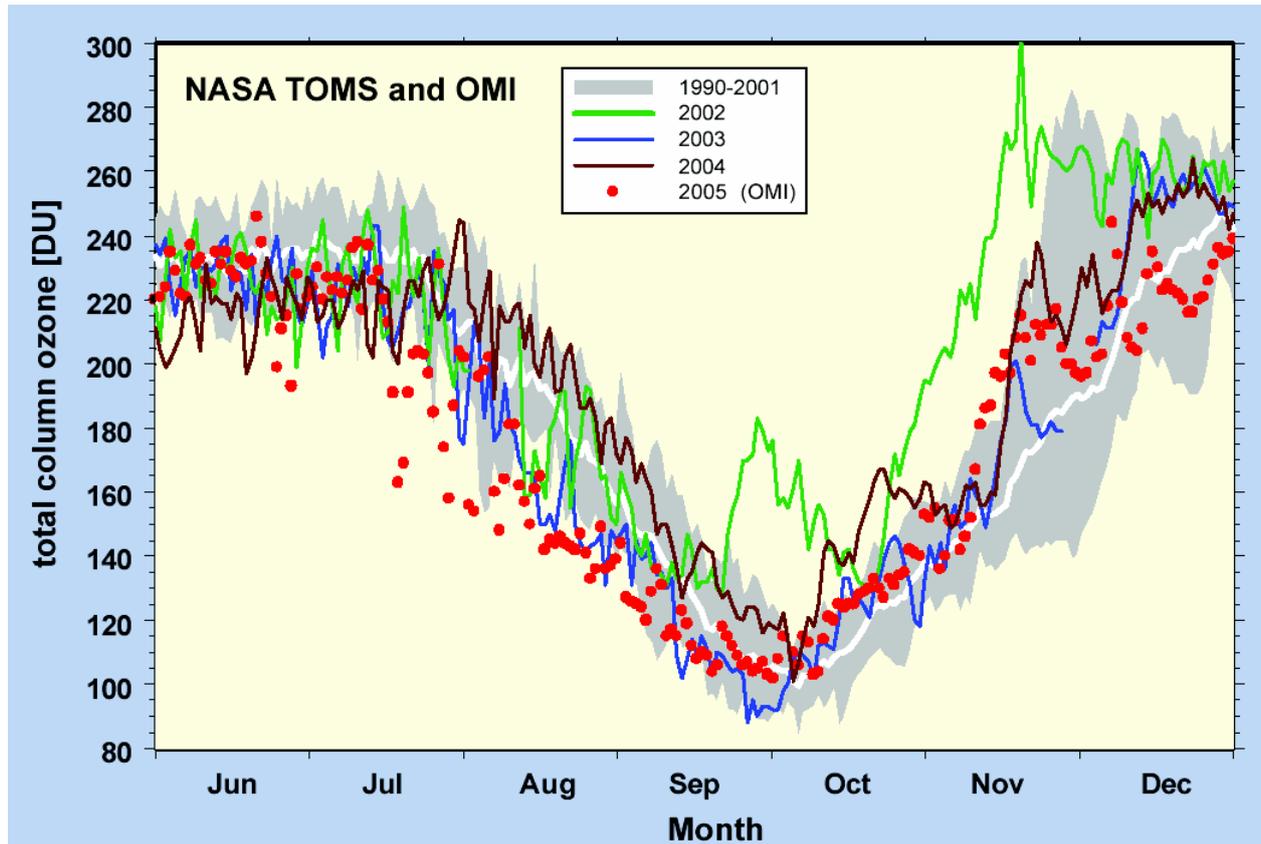


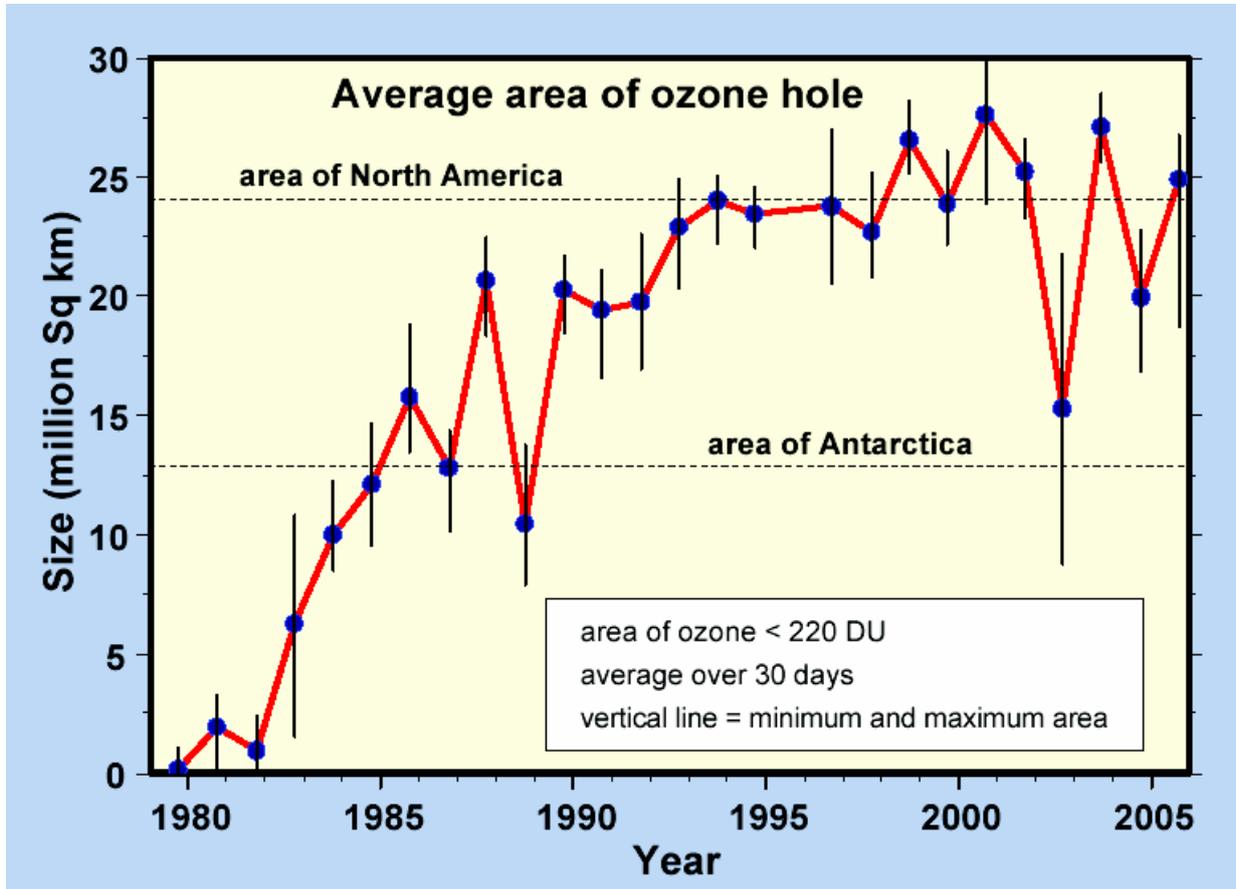
[WMO Ozone Bulletin, 2005, No.8]

図1： 南極昭和基地におけるオゾンゾンデ観測による、高度12～20 kmの合計オゾン量の経年変化。この高度は、オゾンホール時に最もオゾンが破壊される高度である。オゾン量は1970年代後半から減少し始め、現在はほぼ最低レベルで推移していることがわかる。2002年は、特異な気象条件であったため、例外的にオゾン破壊が少なかった。



[WMO Ozone Bulletin, 2005, No.8]

図2： 米人工衛星センサーTOMS及びOMIが観測した、1990年代以降南緯40度以南における各年の最低オゾン全量。南極上空のオゾン全量は、オゾンホールが起こり始める8月から減少し始め、9月末～10月初めに最低となり、その後夏の到来とともに消滅する。最近の2003年や2005年をみても、特にオゾンホールの前半に関しては歴代最低で推移していることがわかる。一方、オゾンホール後半のオゾン全量に関しては、回復が早まってきている傾向が見える。



[WMO Ozone Bulletin, 2005, No.8]

図3： 米人工衛星センサーTOMS及びOMIの歴代の観測から導出した、南極オゾンホールサイズの経年変化。オゾンホールサイズは、各年のオゾンホールが最大規模に拡大した時期に、オゾン全量の値が220 DU(ドブソン・ユニット)以下である場所の面積の30日間の平均値として定義した。2000年代に入ってから、年々変動が大きいものの、明らかな回復傾向は見取れない。